

七 福 神

特定非営利活動法人 ミランクラブジャパン
理事長 マナングール マダーブ ナラエン

七福神には大黒天、毘沙門天、弁財天、寿老人、福祿寿、布袋、恵比寿がいる。



日本では新年に七福神巡りをしたり、初夢で宝船に乗って現れる七福神を見られるよう枕の下にその姿を入れたりする。

ネパールと共通する天神はヒンドゥー教からくる大黒天、毘沙門天、弁財天である。日本に伝わる過程で中国道教の寿老人、福祿寿、布袋が加わり、日本古来の神道から恵比寿が加わった。

今回はヒンドゥー教からの三神について書いてみる。

まず大黒天は「マハーカーラ（摩訶迦羅）」というヒンドゥー教の破壊の神、シヴァ神の化身である。ネパールではマハーは大きい、カーラは死と時、暗黒を意味する。ネパールで死が訪れることをカーラ・アヨと言う。仏教では大黒天は大乗仏教の一神として祭られる。仏教とともに日本に伝わり七福神の神となった。

日本においては、大黒と大国の音写が同じことから、古くからの神道の神である大国主命と習合され、当初は破壊と豊

穰の神として信仰された。しかし後には豊穰の面だけ残り、食物、財福を司り、大地を掌握（農業）する神となった。一度仏となったが、人々に福德を授けるために再びこの世に現れたという。江戸時代になると米俵に乗るといった現在よく見る姿になった。大黒天の乗る米俵は人々に大地の恵みをもたらし、衣食住を満たし、財運と繁栄を授けてくれる。大きな袋を背負い、打出小槌を持ち、頭巾を被る姿はよく知られている。

ネパールではマハーカーラ寺院はあちこちにある。カトマンズではニューロードの入口にあるものが有名だ。そして旧王宮広場前にある黒色の怖そうなカーラバイラヴはあまりに有名だ。日本の大黒天とは似ても似つかないこのカーラバイラヴは観光客の撮影スポットともなっている。マハーカーラはバイラヴとも呼ばれている。



大黒天



カーラバイラヴ

次に毘沙門天、ネパール名ヴァイシュラヴァナはヒンドゥー教の神話で財宝神を前身とするクペーラ神である。日本では多聞天とも呼ばれる。中国に伝わる過程で武神としての信仰が生まれ、四天王の一尊たる武神・守護神とされた。ヴァイシュラヴァナが音写され毘沙門となっ

た。

毘沙門天は土地を守る神として祭られるようになった。毘沙門信仰は平安時代の鞍馬寺が発祥とされる。室町時代末期には日本独自の信仰として七福神の一尊とされ、江戸時代以降は特に勝負事に利益ありとして崇められる。四天王の中心として一番の信頼があり、土地の北方を守る。毘沙門天を祀れば、金持ちになれると信じられている。

神話では毘沙門天は梵天（ブラフマー）の息子で、シヴァの崇拝者である。七福神の中で唯一、武将の姿をしていて、右手に宝棒、左手に宝塔、足の下に邪鬼を踏みつけている。融通招福の神として信仰されている。



ご紹介する最後は弁財天、サンスクリット語でサラスヴァティーになるが、水（湖）に関わるものを意味する。彼女はヒンドゥー教の創造の神ブラフマーの妻で芸術、学問などを司る女神として祀られる。本来はブラフマーが自らの体から造り出したサラスヴァティーだが、そのあまりの美しさに妻に迎えようとした。いやがるサラスヴァティーが逃げないよう常に見張るため、自ら顔の後、左右にも顔を作り、さらにその上にも5つ目の顔を作った。これを見て求婚から逃れられないと観念したサラスヴァティーはブラフマーと結婚する。後に人類の始祖とされるマヌが誕生したとされる。

しかし異なった説もある。それはヒンドゥー教の維持の神ヴィシュヌの妻であったという説だ。

水と豊穡の女神とされることから川の流れるように流れるものすべて（言葉、弁舌、知識、音楽など）の女神として祭る。サラスヴァティーは水辺に描かれることが多い。

中国からの仏教伝来時に『金光明経』を通じて日本に伝わり、七福神の弁才天として祭られ、「才」の字が「財」にも通じることから財宝神としての性格をもつようになり弁財天と書かれるようになったという。後に勝運守護の神様として広く信仰を集めた。知恵財宝、愛嬌・縁結びの徳があるといわれている。

弁財天は4本の腕を持ち数珠と経典（ヴェーダ）、琵琶に似た弦楽器ヴィーナを持ち白鳥または孔雀に乗るか、蓮華に座る姿に描かれることが多い。



上：クベラ、下：毘沙門天



左：サラスヴァティー、右：弁財天